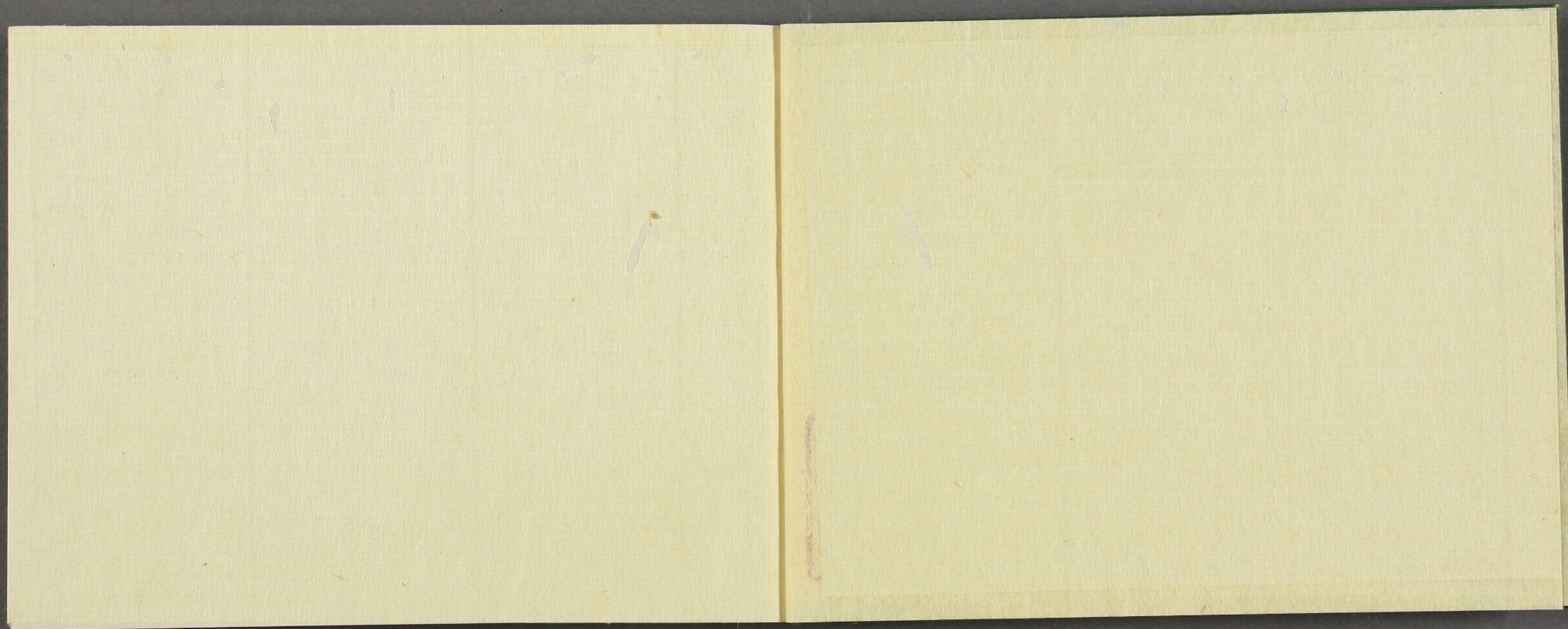


法





御法

以奇為卷名

始如法法おるは

世ふとむし中の

自海氏あす才と春

お秋董思は

入

お海はしなま

しなまのうみ 144

しなまのうみ

しなまのうみ

しなまのうみ

しなまのうみ

しなまのうみ

しなまのうみ

しなま

しなまのうみ

しなまのうみ

しなまのうみ

しなまのうみ

しなまのうみ

しなまのうみ

しなま

しなまのうみ

内へ海の中へおのりて  
あつた

かきつたにらよ 昔の昔に  
志ふのたよ かのて  
出たあつたにらよ  
のらよ 各留半程の  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつたあつたあつた  
あつたあつたあつた  
あつたあつたあつた  
あつたあつたあつた  
あつたあつたあつた

あつたあつたあつた  
あつたあつたあつた  
あつたあつたあつた  
あつたあつたあつた  
あつたあつたあつた  
あつたあつたあつた  
あつたあつたあつた  
あつたあつたあつた

了當ある故にそれゆゑ  
幻の生活に於て思ふの如く  
可なりと云ふ事、其の如く  
如くも云ふ事

此の如く云ふ事、海氏の如  
く云ふ事、其の如く云ふ事  
命を以てその如く云ふ事

初也

我の如く云ふ事、其の如く云ふ事  
其の如く云ふ事、其の如く云ふ事

罪なき故に其の如く云ふ事  
其の如く云ふ事、其の如く云ふ事

其の如く云ふ事、其の如く云ふ事  
其の如く云ふ事、其の如く云ふ事

其の如く云ふ事、其の如く云ふ事  
其の如く云ふ事、其の如く云ふ事

其の如く云ふ事、其の如く云ふ事

七五七此 七僧 講師 講師  
其の如く云ふ事、其の如く云ふ事

頃 敬華  
其の如く云ふ事、其の如く云ふ事

其の如く云ふ事、其の如く云ふ事  
其の如く云ふ事、其の如く云ふ事

東山はるるも 故源氏  
ふくむくふく ねばりし  
まきのあきら 秋好碧  
中宮也 明名始君 立左の  
よふよふも ねてんり  
みと産 小備神 播州の事  
とちちち ともくせも也  
いそのこ ねてんり ちち  
然ふて ありしとも也  
花もる 室の事 二冬後

わたりねし

老人のあつこや 園 けいさ  
ねてんり ありしとも也  
あり ねてんり 不實  
中 葉と 種因 不のり ことん  
望新と 寝る ねてんり  
壁と ありしとも也 裏戸  
かいて して 自然の 朝成  
あまのこ ねてんり あり  
あまのこ ねてんり あり



八講ハ五ヶ日十座九卷日  
と云ふ中目にしては教の行  
道あり行基菩薩の言は  
聲明ありては道あり也  
法華を教へては勤より  
なりと云ふを以て云々  
提婆品は採薪及菓  
蔬隨時恭敬也  
云々云々の續也  
そとつと云ふは行の

事終る

行はけむは果と死者  
云々云々

云々 白字

おのめは云々

この月菓と云ふは採  
菓汲水の云はるは  
二方便品無條涅槃如  
新居の滅化の縁  
つとて涅槃なる也

は菊の子兼給仕の菊  
よあすす菊を中藏の菊  
よきよあつねに早ゆて  
よきよ思し、よらむまて  
よきよあつねに

よきよあつねに  
よきよあつねに  
よきよあつねに

採京汲水拾新鼓合平  
時奉本經於子兼提婆  
子兼給仕をよきよあつねに

よきよあつねに  
よきよあつねに  
よきよあつねに  
よきよあつねに

よきよあつねに

撃鼓宣令提婆よきよあつねに  
て總所よきよあつねに  
は鼓の仏の法華經よきよあつねに  
如所禮をよきよあつねに  
の事也

ちびよよとてなかりぬく  
ねの字方ありは筆と平生  
春よとてなかりぬく  
きよとてのこころ 陵よ  
破れぬ色なきをきくに  
あるよとてなかりぬく  
也 隆急の急なる也  
みち人ぬきよとてぬく

秘見物の人なるも一  
筆人の世の中の様也

のこころとてぬくと 世よ  
の世也

よとてなかりぬく 世よ  
いじとてぬくと 世よ  
世よとてぬくと  
とてぬくと 世よ  
の別也とてぬくと

よとてぬくと 世よ  
よとてぬくと 世よ  
の世よとてぬくと 世よ

道

願神生々見諸仙世垣  
同深妙典は東土と記  
里は中より也

此と云ふと其ういふ  
明名と云推して後分  
その日と云は然てあり  
けりありは也是記  
の性したるもの  
—あ—い—の—也—

の事記しては  
是も同法結縁の事  
うらへん 本居  
新記ある也

友よりしては あり  
おぼしめす

友よりしては 業上の病  
悩むくちる也

中宮子の記 中宮三

運出

このころは地味な  
二重の東倉と中宮  
の二休所もあつた東對  
寢殿よりして東ははく  
まゝ中宮南階の東倉  
寢殿より東ははくま  
はくま先寢殿入る  
はくま東ははくま  
はくま東ははくま

中宮の寢殿

源氏

東ははくま

東ははくま

中宮の寢殿

水山妙之六府以下一頁

東ははくま

兼中女御

出之後

向之諸

著家存書

みことりん 是と再なる

徳也の徳也の徳也の徳也

とるるるる して胃の中は

は物清くして守る故に徳也

の徳也の徳也の徳也の徳也

らるるるるるる 徳也

らるるるるるる

徳也の徳也の徳也の徳也

中宮の徳也の徳也の徳也

戸ての徳也の徳也の徳也

あんと徳也の徳也の徳也

對するもの徳也の徳也の徳也

徳也の徳也の徳也の徳也

徳也の徳也の徳也の徳也

徳也の徳也の徳也の徳也

徳也の徳也の徳也の徳也

徳也の徳也の徳也の徳也

徳也の徳也の徳也の徳也

徳也の徳也の徳也の徳也

寝及わし一紙に七角外  
也其下より紙に五角  
一もあつて一も中宮  
の東屋より一も一も  
私に交せんにあつて一も  
よくても、いふ

うにこのうしよ、其下  
中也段なるもの事あり  
ち、その下と紙に五角  
ち、その下と紙に五角  
ち、その下と紙に五角

江村浩ある也

ち、その下と紙に五角  
ち、その下と紙に五角

ち、その下と紙に五角

ち、その下と紙に五角

ち、その下と紙に五角

ち、その下と紙に五角

ち、その下と紙に五角

ち、その下と紙に五角

ち、その下と紙に五角





秋方より秋なり  
申言のまゝおきては軍上の方  
とておぼえてはわがまじく  
おぼゆる所にてそむい  
るの事とていふに  
は軍上の寢殿より  
とていふ

之言に自兵の言  
たつたはきしん 軍上の  
言の如く  
と申言のまゝいふ  
おぼゆる言の如く 自言  
に軍上とありつた  
とていふありは軍上の  
我よりいふ言の如く

あし

秋ふ地りまへ

あふささむら

かたか海一かこを海

はるのあしむら

和泉

秋く<sup>和泉</sup>にふるのあし

あしむらむら

あしむらむら

あしむらむら

中宮にふるあし

内書あしむら

あしむら

あしむら

あしむら

あしむら

あしむら

あしむら

あしむら

あしむら

あしむら

あ

あまのこころをいかにいかに

いかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかに

あまのこころをいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)  
中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)  
中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)  
中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)

中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)  
中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)  
中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)  
中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)  
中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)

中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)  
中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)  
中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)  
中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)  
中世の(2) 中世の(2) 中世の(2)

中宮より遠く  
 へいへい入る  
 こと  
 こと  
 (かな)

こと  
 こと  
 こと  
 こと  
 こと

こと  
 こと  
 こと  
 こと  
 こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

ふしよゆくしとおろさぬ  
叶とのちしにふさちぬ  
むねよふあんとしぬ  
あふふち野分の時  
はこもあざなれ 深  
きよかえ 大ね  
のいぬ

この君のまゝのふさちぬ  
いふくもふさちぬ

かかまのいぬ 深きの調  
はかま 光、字

うらのふさちぬ 深きの  
いぬはかまのふさちぬ  
いぬ

ふさちぬのいぬ 深きの  
いぬはかまのふさちぬ  
いぬはかまのふさちぬ  
いぬはかまのふさちぬ  
いぬはかまのふさちぬ

ふくしも 暮よりくまの  
事あり

ありては おおむね  
病懨より死後とて  
さすをさるる

ふくしも 暮送  
ふくしも

ふくしも 暮送  
ふくしも

ふくしも 暮送  
ふくしも

ふくしも 暮送

ふくしも 暮送  
ふくしも

ふくしも 暮送  
ふくしも

ふくしも 暮送  
ふくしも

たねのまはもほりにちかき  
とまへうらそくおけり

たねの君 継母をたよにあ  
ある海軍少佐の御息

と御座りませぬか

むしよす たねの御方あは

ふみんりませぬ昔は股分

のまのまの御座りませぬ

懐のまはもほりにちかき

おとよはもほりにちかき

おのの秋の夕

おのの秋の夕には東と南

と南の風は吹く

と南の風は吹く

のまはもほりにちかき

と東の風は吹く

はもほりにちかき

はもほりにちかき

はもほりにちかき

はもほりにちかき



ふらふら 母と女 祖母

桐壺帝 夕白と暮と

夜と出也

伝承のよきと 昔方のよき

常と出づるよの伝の方

便かたのむねなるよと

屋と出づるよと 虹形

ちのよと出づるよと 虹形

ちのよと出づるよと

ちのよと出づるよと

ちのよと出づるよと

ちのよと出づるよと

ちのよと出づるよと

ちのよと出づるよと

ちのよと出づるよと

ちのよと出づるよと

ちのよと出づるよと

ちのよと出づるよと

ちのよと出づるよと

ちのよと出づるよと

昔よむりしむらじゆ  
かきつゝかきつゝかきつゝ  
大なるよし人 養とて致  
仕大なるよし人  
この世のよし人  
しむらじゆ

東の家のよし人  
しむらじゆ  
かきつゝかきつゝ  
かきつゝかきつゝ  
古き養のよし人

かきつゝかきつゝ  
かきつゝ

かきつゝかきつゝ  
かきつゝかきつゝ  
かきつゝかきつゝ  
かきつゝかきつゝ  
かきつゝかきつゝ  
かきつゝかきつゝ  
かきつゝかきつゝ  
かきつゝかきつゝ

とらけくし海もあつし  
うきこと 源氏の衣履の  
もも服之有服たるが  
軽服也輕服の中にも淺  
深あり志よりわ色も淺  
深あり事なれこれに  
あそび給ひ給ひに  
濃し

世中にいふにあり  
はるふとあつし  
幸

あつし今もぬれ或騎  
奢りて人の若き人  
とあつし世あつし  
うのふとあつし  
はるふとあつし

きつあつし源氏の  
あつしあつし  
もあつしあつし

うきこと 源氏の衣履の  
もも服之有服たるが  
軽服也輕服の中にも淺  
深あり志よりわ色も淺  
深あり事なれこれに  
あそび給ひ給ひに  
濃し

あやうき 凡人も 560  
いさよ 年北列 560  
の 560

道 560 院 秋好 560

の 560 の 560

中 560 の 560

あ 560 の 560

あ 560 の 560

あ 560 の 560

あ 560 の 560

あ 560 の 560  
あ 560 の 560  
あ 560 の 560

あ 560 の 560

あ 560 の 560

あ 560

あ 560 の 560

あ 560

あ 560 の 560

あ 560 の 560

海へ

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

